

うるわしの島・中華民国（台湾）

前 台北日本人学校

現 斜里町立斜里中学校 立花 武人

I はじめに

2008年4月より3年間、在外教育施設派遣教員として台北日本人学校に勤務しました。派遣期間中、たくさんの方々に支えられながら多くのことを体験し、また、学ぶことができました。

ここに、台湾の様子、台北日本人学校での取組について紹介します。

II 台湾の概要

中華民国台湾の主な社会・政治・経済指標

(1) 自然

面積 約 36,000 km² (九州を一回り小さくした大きさ 九州：42,137 km²)

気候 北回帰線を挟んで北が亜熱帯、南が熱帯

台北付近は温帯湿潤気候（ケッペンの気候区）・・・東京と同じ気候区

(2) 社会

人口 2,316 万人（2010.12 月現在）、人口密度 668 人/km²

台湾最大の都市台北は、262 万人

民族 最大多数の漢族以外に、マレー、ポロネシア語系統の先住少数民族が 14 種を数える

宗教 宗教・信仰の自由が憲法で認められている。政府に正式登録

されている主な宗教としては、仏教、道教、カトリック、プロテスタント、回教、天理教、などがある。未登録の宗教団体を入れれば、100 余種以上に及びます。

(3) 政治

政体 中華民国憲法によれば、「三民主義に基づく民有、民治、民享の民主共和である」と規定されています。



(4) 経済

GDP 4298 億米ドル

一人あたりの GDP：18458 米ドル

製造業従事者平均月間給与：39152 元

貿易輸出：2746 億米ドル

輸入：2512 億米ドル（2010 年時点）



1. 歴史

はじめに

台湾が本格的に世界史の舞台に登場するのは 16 世紀のことです。台湾に住む原住民の人々に関しては中国南方より移住した人々が起源である説と東南アジアから移住した説とがあります。現在は前者が有力です。その後、500 年ほど前から福建から来た人々や日本人も暮らし、倭寇の根拠地にもなっていました。

また戦国時代の日本から豊臣秀吉が、朝貢を求めて高山王宛に国書を届けようとしたが、当時台湾全土を支配下に置く王朝は存在せず失敗に終わっています。

台湾は『フォルモサ』と呼ばれていますが、これは 1544 年にポルトガル船が台湾を通過したときに、船員が緑に覆われた台湾を見て『イラー・フォルモサ Ilha Formosa (麗しの島)』と叫んだことに由来しています。そのほかヨーロッパの国ではスペイン・オランダも台湾に進出しました。

オランダによる統治

スペインは 1626 年に台湾北部を占領し、大陸から移民を呼んで北部を開拓していきました。ところが同じ時期に南部を中心に進出したオランダ東インド会社が、1642 年にスペインを台湾から追い出すことに成功し、その後約 20 年間統治が続き、大量に大陸から移民してきました。

鄭氏政権

そのオランダ人を追い出して、国づくりを始めたのが歌舞伎の「国姓爺合戦」のモデルにもなった「鄭成功」です。ときに 1661 年のことでした。鄭成功は長崎の平戸で生まれ、父が漢人で母が日本人でした。7 歳で父の故郷の福建に移り、成長して明朝に従いました。しかし、明朝が清朝に滅ぼされると、「反清復明」をめざし、軍勢を引き連れて台湾にや

ってきてオランダ軍と戦い勝利し、鄭氏政権を樹立しました。鄭氏政権は清朝の攻撃を受けて 1683 年に降伏するまでの間、3 代 23 年間続くことになりました。

清朝による支配

清朝の領土となって以降、清朝は、台湾を福建省の管理下に置きました。大陸から渡ってくる人は増加し、台湾各地に町や村をつくりました。

台北盆地に最初に訪れた清朝の役人に「郁永河 (ゆうえいか)」という人がいます。郁永河は、1697 年に淡水河をさかのぼり、關渡 (グアンドゥー) を通り抜け、北投 (ペイトウ) の上にのぼりました。その報告で「關渡は山が迫って門のように狭いが、内の方は湖のように広くてはでない」と当時の地形を説明しています。

そのころ台北では、原住民と移民の漢人たちが、小舟を使い川の岸辺で物々交換を始めるようになりました。このとき原住民が使用していた丸木船を「マンクァ」とよび、漢人は「艋舢 (バンガ)」と書き、この岸辺あたりの地名となりました。ここが台北の起源で、のちに日本人が呼びやすいように「萬華 (ワンファー)」と書き換え、現在も地名として使われています。

1874 年、外国勢力が中国大陸や台湾に進出する傾向が見えてきて、清朝は本格的に台湾経営に乗り出しました。清朝は「大稻埕 (ダーダオチェン)」の南の大加蚋堡 (ダーチャールエイバオ) に台北府をおき、台北は政治と経済の中心地となりました。

日本による統治

1894 年に日清戦争が起こり、翌年下関条約が結ばれると、台湾は日本に割譲されることとなりました。台湾人による抵抗も続きましたが日本軍により鎮圧され、台湾総督府が台北に置かれました。港、鉄道、道路が整備

され、学校などの建築物などもつくられました。特に日本よりも台湾で知名度が高い「八田興一」は、灌漑施設が不十分だった南部に烏山頭ダムを建設し、水路を細かくはりめぐらすなどの治水工事を行い、大いに地域の人々に貢献しました。



大戦後の台湾

1945年の日本の敗戦により台湾は「中華民国」となり、再び大陸より移民がやってくるようになりました。戦前から住んでいる人々を「本省人」、戦後やってきた人々を「外省人」とよび、たびたび対立することとなりました。1947年2月28日の「2・28事件」は特に被害の大きい事件となりました。

大陸では共産党が力を伸ばし、1949年には「中華人民共和国」がつけられました。「蒋介石」の国民政府（中華民国政府）の人々は軍隊と共に台湾に移り、台湾、澎湖、金門、馬祖、そして周辺の島々の統治を維持してきました。以来、台湾海峡の兩岸は別々の領土として統治され、それぞれにアイデンティティを発展させてきました。戦後中華民国（台湾）が国際連合に承認されていましたが、中華人民共和国が力をもつようになり、1972年には日本との正式な国交もなくなりました。



現在の台湾

現在、台湾は「中華民国」として知られています。

国旗である「青天白日滿地紅旗」は白は平等、青は自由、そして深紅は革命に身を捧げた人々の血と友情を象徴しています。

政治的発展の面では、台湾は自由で活気あふれる民主主義への道を歩んできています。政府は、1987年に戒厳令を解除し、民主化を推進するための一連の政治改革を開始、そして1996年、台湾人民による初の総統直接選挙が実現しました。さらに2000年の総統選挙では、50年にわたる国民党政権が終結し、政権は勝利を得た民主進歩党に平和的に移行されました。2008年の選挙では、8年ぶりに国民党政権が樹立し、大陸との関係も新たな展開を見せようとしています。

2. 外交

台湾は1980年代末から、国際社会において国家としての地位を守るために、「実務外交」を推進し、外交関係樹立国の獲得、国際機関等への加入に努めてきました。その結果、2002年1月、「独立関税地域」としてWTO（国際貿易機関）に正式加入したほか、OECDの競争政策委員会にオブザーバー参加が認められました。他方、2007年4月、「台湾」の名称でWHOの正式メンバーとして加盟申請を行う旨発表しましたが、同年5月に行われたWHO総会において採決の結果、議題として取り扱われるに至りませんでした。同年9月、国連総会において台湾の友好国が、台湾の国連加盟申請を総会の議題とすべき旨の提案をしましたが、議題にすべきでない

旨の意見が多数を占め、議題になりませんでした。

2000年には29カ国と外交関係を樹立していましたが、その後徐々に減少し、2008年には23カ国となっています。いずれも中国と国交がない国々です。

また、2008年に政権を奪回した国民党の馬英九総統は、台湾がすでにもっている力を活用し、国交国との友好を強化し、国交のない国との協力を拡大していくとする「活路外交」を推進しています。中でも中国との関係改善を重要視しており、週末には中台直行チャーター便を就航させるなど関係改善に力を入れています。

日本との関係

○基本的枠組み

日台関係：1972年の日中共同声明に従い、非政府間の実務関係

○経済関係

対台貿易（2010年、JETRO）

- ① 貿易額（日本の貿易相手先として台湾は、米国、中国、韓国に次いで第4位）

輸出：180億ドル

輸入：519億ドル

- ② 主要品目

輸出：電気機械、一般機械、
化学製品、金属・金属製品

輸入：電気機械、一般機械、
化学製品、金属・金属製品

○人的往来（2010年）

日本→訪台者数 100万人（交通部観光局）

台湾→訪日者数 126万人（入国管理局）

○在留邦人数

20373人（2009年12月末）

○その他

2008年6月の尖閣諸島（中国語名：釣魚島）沖の漁船事故をめぐって日台関係が悪化しましたが、日本側がお詫びと

賠償を表明したことで落ち着きを取り戻すとともに、相互信頼が増進されたとの報道がありました。

3. 教育

アジアの国々は世界的にも教育熱心で知られますが、台湾もこうした状況に変わりはなく、より高い学歴を目指す若者たちは、受験戦争に勝ち抜くために勉強に打ち込んでいます。また、こういった背景から、「補習班」と呼ばれる塾があらゆる場所で見られます。

台湾の教育制度は、「学前教育」「国民教育」「中等教育」「高等教育」の4段階に分けられています。「学前教育」とは、幼稚園教育を指し、いわゆる義務教育は、「国民教育」と呼ばれます。「中等教育」は、「初級中学」と「高級中学」のそれぞれ3年間ですが、1968年から「初級中学」を含めた9年間を「国民教育（義務教育）」としています。学期は、アメリカと同じ9月を新学期とし、2学期制を採用しており、アメリカへの留学生が多い背景ともなっています。

台北市の国民小学校は、現在およそ私学を含め155校、国民中学校は88校にのぼります。義務教育までは、無試験で入学できるため、日本の高校に相当する「高級中学（省略は「高中」）」への入試から、受験熱が高まります。

「高等教育」は、専科学校、独立学院（単科大学）、大学、研究所（大学院）に分かれています。専科学校とは、工業、商業、農業、医療技術など、技術的スキルの育成を目的とする教育機関で、中学卒業後に入学する「五専」（日本の高等専門学校）と高校卒業後に入学する「二専」（短期大学）があります。なお、独立学院とは、学部が3つ未満の単科大学を指します。

4年生大学および夜間大学については、1954年から共通選抜方式「連合考試」を採

用しています。日本のセンター試験よりも厳しい条件が課せられており、試験の成績順に希望した大学・学科への入学資格が与えられます。現在は大学の数も増え、大学志望者の8割が大学へ進学しています。一方、一点を争う既存の入試制度とは別に、「特殊受験生」に対する優遇制度を併存しています。退役軍

人、原住民、モンゴル・チベット、マカオ・香港、華僑、海外居住者を対象に、満点の引き下げや試験結果への加点などの措置がとられています。

Ⅲ 台北日本人学校（台北市日僑學校）について



きめ細やかな教育活動を展開しています。

1. 教育目的

中華民国に在留または居住する日本人子女に、日本における教育と同じく、日本国憲法及び教育基本法に示されている教育の目的・方針に従い、心豊かな心身ともに健全で、世界に目を向けた子女の育成を目的とします。

2. 教育目標

「思いやりと自ら考える力を育み、心身ともにたくましい児童・生徒を育成する」

「めざす子ども像」

- ・自ら考え、課題解決できる子
- ・感性豊かな心をもつ子
- ・たくましく未来を切り開く元気な子

3. 指導の重点

(1) 学習指導法や教材の研究・開発を共同で

行い、指導力及び授業力の向上を図る。

(2) 基礎的・基本的学力の定着と一層の学力向上を図る。

(3) すこやかハートづくりの推進（あいさつ言葉遣い・礼儀）

・あいさつ・礼儀を基本とした良好な人間関係の育成を一層推進する。

・「言語環境」を大切にし、「話す・聞く」の伝え合う力の向上を図る。

(4) さわやかマナーアップづくりの推進（ルール・マナー・時と場所をわきまえた行動）

・集団生活を通して健全な社会生活の基礎を培うために、学級指導、道徳指導、学年学校行事、児童会・生徒会活動の充実を図り、相互理解と協働の精神を

育み、感動や達成感・充実感を実感する機会と場を意図的・計画的に推進する。

- (5) ふれあい学級づくりの推進（3かけ運動の推進：声かけ・目をかけ・手をかける）
- ・児童生徒一人ひとりの良さを認め、そして自信をもたせる指導を推進し、自分らしさを伸長する児童生徒の育成をめざす。
 - ・お互いを思いやる寛容な価値観の醸成に努め、自主性と社会性の育成を図る。
- (6) 強いからだと強い心の育成
- ・持久走、縄跳び、学校行事の工夫、各種イベントへの積極的な参加への呼びかけ。
- (7) 交流事業の推進・充実
- ・効果的な実のある交流事業を実施するために工夫改善に努める。

4. 児童生徒数（2010年8月調べ）

学級数は小学校 17 クラス、中学校 6 クラス、小学部特別支援学級（ひまわり学級）1 クラスで全校普通学級 23 クラス、特別支援学級 1 クラスの合計 24 学級になります。児童生徒数は 689 名で在外教育施設の中でも大規模校に入ります。兄弟・姉妹で在籍している家庭も多く、家庭数としては 528 世帯で近年はほぼ在籍数が横ばい傾向になっており、やや安定傾向にあります。台北日本人学校の特徴としては、国際家庭（日本人と台湾人の組み合わせが大半）の割合がほぼ 40% 近くにとぼることがあげられます。従って、子どもたちは二重国籍であることも多く、家庭環境も様々です。

日本からの駐在員等の子どもの出身地は圧倒的に首都圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）が多く、例年 7 割程度が首都圏の出身です。

残りも関西地区や東海地区の大都市からの編入や他の在外教育施設からの編入が多くなっています。また、現地校からの編入も少なからずあります。毎年 100 名程度の退学があり、編入も 100 名程度ありますので、学籍の手続きや管理には気を遣います。

5. 台北日本人学校の現在

(1) 学習指導

児童生徒の学習意欲は旺盛で、特に、日本語の環境に乏しいためか、大変よく本を読みます。学習指導は日本国内と同じです。保護者が家庭学習をよく見てくださるので助かります。また、塾に通っている児童生徒も少なくありません。

台北日本人学校の特徴としては、日本人と台湾人との婚姻の児童生徒が全体の 40% 近く在籍しており、中には日本語の理解が不十分の子どもたちがいます。そのため、放課後に小学部の 1、2 年生を対象に日本語の補習（日語補習）を行っています。

また、学校を会場として実用英語検定や漢字検定、中国語検定を土曜・日曜に実施しています。

(2) 国際交流

国際理解・他文化理解教育、現地理解教育の一環として、学年毎に現地校等との「交流会」や「1 日交換留学」を実施しています。運動会などの学校行事にも現地校の児童生徒を招いています。



(3) 課外活動

課外活動とは、日本の学校での「部活動」にあたる活動に参加する児童生徒とその保護者及び指導者が自主的に運営しているものです。指導には、教職員やボランティアの保護者・関係者の方、外

部からの指導者があっています。各種大会参加や練習試合の相手校探しやイベント参加など簡単ではない各部の活動ですが、子どもたちのがんばる姿や成就感あふれる笑顔のためにみんな、がんばっています。



文化・芸術系の課外活動 (7部)

合計 94 名が所属 (2010 年)

和太鼓、軽音楽、美術、吹奏楽
中国結び、ダンス、絵本タイム

体育系の課外活動 (11部)

合計 227 名が所属 (2010 年)

野球、楽々棒球、サッカー、水泳
硬式テニス、陸上競技、剣道、卓球
バドミントン、バスケットボール
バレーボール

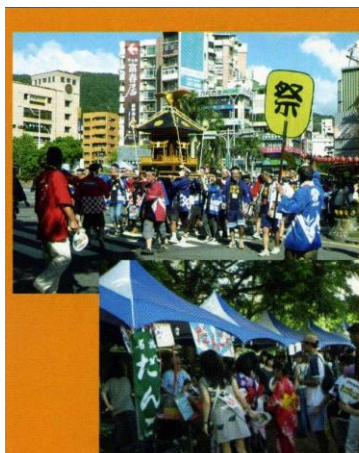


(4) PTA 活動

子どもたちのために協力し合う「子どもたちの成長を応援する PTA」誰もが楽しく「みんなでやろう PTA」を合い言葉に、笑顔あふれる台北日本人学校を目指して活動しています。PTA の役割は大きく、学校の潤滑油として保護者と教員とがよりよく協力体制をつくり、学校全体の活性化につなげています。また、大規模な PTA 行事もあり地域の方々なども参加するイベントもあります。さらに PTA サークルもあり、同好の保護者を中心にバレーボール、バドミントン、ドラゴンボートなどの活動を行っています。

代表的な PTA 行事

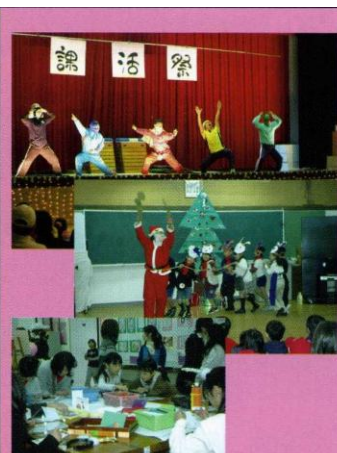
学校と協力して多くの PTA 行事が実施されています。



9月下旬実施「夏祭り」
地域の方を含め、4000人
近い方が来場します。



11月下旬実施「古本市」
たくさんの日本書籍の古本
が廉価で販売されます。



12月中旬実施「課活祭」
文化系課外活動を中心に
発表や催しを行います。

IV おわりに

平成 20 年度から 3 年間、台北で過ごすことができました。便利で生活しやすい台北は、目に飛び込んでくる全てのものが刺激的で、魅力的でした。

ジリジリと肌を焼くような日差しと熱波で呼吸するのも苦しくなる経験は、日本、北海道では決して味わうことのできないものでした。

今、こうしてふり返るとたくさんの思い出がよみがえり、感慨深いものがあります。特に、日本では忘れ去られている他人を思いやる優しさのありがたさを痛切に感じることもできました。

台湾での経験を、これからの教員生活の糧とし、北海道の子どもたちの成長のために今後も精進していきたいと思えます。

参考・引用文献

- 「みんなで学ぼう台北台湾」 (台北日本人学校 社会科副読本)
「平成 22 年度 学校要覧」 (台北日本人学校)
「平成 21 年度派遣教員赴任の手引き」 (台北日本人学校)

参考にさせていただいた HP

台北日本人学校ホームページ (<http://www.taipeijs.org/>)